

Giant kelp			Macrocystis, Nereocystis & Alaria の總稱
Goitre sticks (South America)	<i>Phyllogigas</i>		<i>Phyllogigas</i> の莖
Great kelp	<i>Macrocystis pyrifera</i>		
Green dried laver	<i>Ulva pertusa</i>	アナアヲサ	
Green laver	<i>Ulva lactuca</i>		
Green tips	<i>Hypnea spicifera</i>		
Gristle moss	<i>Chondrus ocellatus</i> f. <i>crispus</i>	ヤハヅツノマタ	
Gulf weed	<i>Sargassum enerve</i>	ホンダワラ	
H			
Henware (Orkneys)	<i>Alaria esculenta</i>		
Honeyware	”		
Horse seaweed (Norway & Lapland)	<i>Rhodomenia palmata</i>	ダ ル ス	
I			
Irish moss	<i>Chondrus ocellatus</i> f. <i>crispus</i>	ヤハヅツノマタ	
J			
Jelly moss	<i>Chondrus ocellatus</i> f. <i>crispus</i>	”	
K			
Karengo (New Zealand)	<i>Porphyra</i> の一種		
Kelpie (Caldy Island)	<i>Laminaria cloustoni</i>		
Knobbed wrack	<i>Ascophyllum nodosum</i>		

淡水産紅藻二種の新産地*

森 通 保

チスジノリとして従来我国では鹿児島県、長崎県並びに沖縄産のものを、*Thorea ramosissima* BORY にあてていたが、山田教授(1943)によつて長崎県のチスジノリは米田博士・八木繁一氏(1940)記載の四国松山市外お吉泉産

* この報告は「藻類」寄稿を希望して一昨年(1953)校閲並びに送稿を依頼されたのであるが、この様な報告は採り盡される原因となる事を恐れ気が進まぬまま現在に至つた。併し最近熊本縣から長大、岡田喜一博士に依り同様な発見があり、且つ同博士から發表をすすめて來たので茲に當時の原稿のまま登載する次第である。——瀬川宗吉記

オキチモズク *Nemalionopsis tortuosa* YONEDA et YAGI と同物である事が分つた。又鹿児島・沖縄のチスジノリも *T. ramosissima* とは別種で且つそれぞれ種を異にすべき事が明らかとなり、前者をチスジノリ *T. Okadai* YAMADA, 後者をシマチスジノリ *T. Gaudichaudii* AG. と改められた。

筆者は数年来淡水産紅藻の分布分類並びに生態に興味を持ち、熊本県を中心に調査をしているがこの度熊本県下にもオキチモズクとチスジノリを産する事を知り得たので、その新産地の概略について報告する。チスジノリについては熊本県菊池高等学校渡辺憲吉氏が資料を供されたもので、生育地の状態については氏の調査に待つ事が多い。記して深謝の意を表する。なお始終御指導をいただいている九大農、瀬川博士に深謝する。

1. オキチモズク *Nemalionopsis tortuosa* YONEDA et YAGI

筆者は1948年9月1日たまたま熊本県有佐村下有佐の湧泉でこの紅藻を見出して瀬川博士に査定を御願した処、オキチモズクらしい事が分り、博士は更に山田教授に送付されたので同教授は1949年8月7日有佐村の生育地を調査された。

これを産する泉は「牛の泉」とも「失せずの泉」とも呼ばれて四季その湧水の絶えない泉であつて、その大きさは方1.5mの石垣囲いの浅い井戸である。その表面の半分はコンクリート板で覆われている。泉の水深は約80cm、水底には泥土がかなり沈積して水草が茂り、水の湧出が緩慢でやや止水に近い。オキチモズクの着生するのは僅かに日光を受ける石壁の表面やそれに着生する蘚類の茎である。お吉泉ではこの紅藻は半ば樹林に覆われて且つ流れを伴う泉の流出路に産し、体の高さは5~30cmに生長するそうであるが、「牛の泉」では狭い石壁に点在して体の大きさも10cmを越えるものは極めて稀で消滅の恐れもないとはいえない。着生する環境が日射をさえぎられた半日陰であることは一致するが、止水に生ずる事は注目すべき相違点である。

2. チスジノリ *Thorea Okadai* YAMADA

熊本県米田村で菊池川に産するノリの1種をカンノリ、カワノリ、カワタケ等と呼んで生食又は佃煮としているということを渡辺氏より聞き及んだ。そこでその標本を瀬川博士に送り査定をお願いしたところ、チスジノリ *T. Okadai* である事が明らかになった。

体は普通15~30cm, 稀に60cmを越えるものがあり、粘質に富み美し

い赤紫色乃至紫色或い赤褐色であるが、水中に着生するものは黒褐色に見える。生育地の主なものは米田村坂田部落と川辺村西牧部落の間の渡船場附近で、水深0.6~2mの川底の礫に着生する。流れは認められるが速いという程ではない。通常12月初旬には見られるが、11月初旬に発生する年もあり、又、場合によつては殆んど出現しないと思われる年もある。流水の豊富な点では鹿児島県の川内川と似ている。

有佐のオキチモズクは我国の第三の生育地として有意義である。又、チスジノリ属の北限は本邦としては今まで鹿児島県川内川とされていたが、新たに菊池川がその北限となつた。

(熊本縣立八代高等學校 生物研究室)

文 献

- 八木繁一・米田勇一(1940): 植分地, 9, 2.
 山田幸男(1943): 植研, 19, 5.
 ——(1949. a): 植雑, 62, 729-730.
 ——(1949. b): 植研, 24, 1-12.

アマノリの糸状体に關する 座談會の記録

昭和30年4月5日に、日本水産學會で海藻關係者が集つたのを機會に、集會「アマノリの糸状体に關する座談會」を行つた。會場は「全海苔」の御好意で同會の海苔會館を使はせていただいた。出席者は三宅驥一先生、山田會長以下約40名、時田氏の司會で約3時間にわたつて討議した。當日議論されたことを中心とし、之に時間が足りないため、當日出席されなかつた方々の研究テーマのために話が出なかつた二三の問題をつけ加えてまとめたのが本文である。幹事の手落ちで當日の討議の記録が極めて不完全にしか取れず、脱落や誤りも少なくないと思うが、この點お許しをお願いしたい。

(須藤俊造)。

Conchocelis をはじめて報告した BATTERS (1892) は既にこれを Porphyraeae (今日の Bangioideae, アマノリを含むウシケノリ類) に属するものと指摘していた(殖田)が、アマノリ属 *Porphyra* の生活史との關係には気がつかず *Erithrotrichia* (*Bangia* ウシケノリに近い糸状藻) に近いものと考え